

「900円で買った幸せ」

バンクーバーでの仕事が忙しくなると、礼は帰国する機会が減った。思い出すと、母に電話をかけ、話をするのがほとんどだった。それに、そのほとんどはあわただしい会話だった。時々母の言葉が終わらないうちに、礼は仕事に戻り、電話を切ってしまうこともあった。

ある夏の日、礼は飛行機に乗って日本に帰り、母に会いに行くことになった。家に戻っても特にすることはなく、母と一緒にテレビを見て、ゆっくりと時間を過ごした。

次の日、母が「西友に卵を買いに行こう。」と言った。礼が、「近くにもう一つスーパーがあるじゃないか？」母は目を細めて、少し自慢げに言った。「西友の卵は安いだよ、12個200円、近くの店だと300円なの。」礼は耳を疑った。

道路に出て、タクシーを拾おうとしたそのとき、母が「38番のバスに乗ろう。」と言った。礼が尋ねると、「なぜ38番？」母は「38番のバスは西友専用、無料よ。他のバスに乗ると100円かかるわ。」と言った。礼はまた笑って、「わかったよ。」と言った。

38番の大型バスに乗った。車内はほとんどが年配の人たちで、母ともよく知り合いだった。母が礼と一緒に卵を買いに来たことを聞いて、みんな暖かい目で見てくれた。まるで礼がみんなの息子のようだ。礼の心もほっこりと温かかった。

60個卵を買った。母は礼をスーパーの休憩所に案内し、座らせて、「ここで1時間待とう。」と言った。礼は驚いて尋ねた。「1時間？」母はうなずいて、「次の38番で帰るには、もう1時間かかるのよ。」と言った。

一時間が過ぎるのもそれほど遅くなかった。最後に38番に乗った。車を降りて、礼は卵を持ち、一息ついた。母は特に喜んでいるように見えて、指で数えていて、「卵12個は100円節約、60個だと500円節約、往復のバス代、私たちは2人で400円節約、全部で900円節約ね。」礼もすぐに計算し始めた。家を出てから今まで、4時間を使ったことになるが、バンクーバーの会社でなら、一万円以上の価値を生み出すことができる。礼は心の中でため息をついた。

困難な時、母は礼の学業を支え、育ててくれた。それに、今、幸せな礼が得ることのできないもの、それは母と一緒に過ごす時間だ。その瞬間、礼の顔には笑顔が浮かび、この日、最後まで母と一緒に900円を節約したことに感謝した。時間とお金は幸せのために存在すべきであるからでしょう。